

SUACの学習環境についての考察

花澤信太郎、林左和子、伊坂正人
的場ひろし、和田和美

静岡文化芸術大学研究紀要抜刷

第10巻 2010年3月

SUAC の学習環境についての考察

Considerations on the Possibility of Improvement of Study Environment in SUAC

花澤信太郎
デザイン学部空間造形学科

Shintaro HANAZAWA
Department of Space and Architecture, Faculty of Design

林 左和子
文化政策学部文化政策学科

Sawako HAYASHI
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

伊坂 正人
デザイン学部生産造形学科

Masato ISAKA
Department of Industrial Design, Faculty of Design

的場ひろし
デザイン学部メディア造形学科

Hiroshi MATOBA
Department of Art and Science, Faculty of Design

和田 和美
デザイン学部メディア造形学科

Kazumi WADA
Department of Art and Science, Faculty of Design

大学における学習環境はそのあり方に注目が集まり、ラーニングコモンズの事例に見られるように新しい取り組みが試されている。本研究では静岡文化芸術大学 (SUAC) における学習環境の改善の可能性に着目し、今日の技術を応用した蔵書の配置、学習成果の展示、図書館の有効利用といった側面から考察を行う。

The aim of this report is to seek for the possibility of improvement of study environment in SUAC. Its main points of view are as follows:

- 1) The possibility of new allocation of books by using current information technology.
- 2) The way of displaying works and research results to encourage mutual understanding between people in SUAC and the community.
- 3) How to make more effective use of the SUAC Library.

1. はじめに

現在、執務空間としてのオフィスの空間が注目され、そのあり方に注目が集まっている。先端的なオフィス空間の試みはデザインに係る業界のみならず、オフィスの知的な生産の場としての効率がその成果に直接結びつくコンサルティング業界や広告業界においてもさまざまな事例が実現されている。また、大学における取り組みでは、IT 関連の機器を使用した教室や会議室の設備について多くの実例が報告されており、更に大学の特色であり一般企業に対してのアドバンテージが考えられる図書館およびその蔵書も含めた学習環境の構築という点においても、ラーニング・コモンズなどの流れを受けて、これから更に研究と提案の可能性が残されていると考えられる。

そこで本研究では、静岡文化芸術大学 (以下 SUAC) における新しい学習環境の構築の可能性について、次の 3 つの観点からの研究報告を行う。

- 1) 現在の技術を利用したハードウェアの検討に基づく、SUAC における新しい書籍配置に関する提案。
- 2) 大学内外における学習や研究成果の相互理解を促進するための展示システムの提案。
- 3) 授業や学習時における図書館の有効利用を促進する方法についての考察。

2. 新しい書籍配置の可能性の検討

2-1. 最近の技術の可能性

ここで RFID を含む最近の技術の学習環境への応用について考えると次のような可能性がある事がわかる。

- a. 固体の識別を含めた物品管理の自動化
- b. 特定の動作に対する反応の自動化

そこで、つぎにこの 2 つの可能性を念頭におきながら、SUAC における新しい書籍配置の可能性について検討する。

2-2．書籍管理の自動化とその展開

写真1はRFIDによる図書管理のためのガラス製アンテナと、アンテナのモジュールに合わせた試作の木製ボックスを使用した、書籍の読み取りテストの様子である。このテストからガラス製アンテナを使用したシステムでは書棚の中にある書籍の自動読み取りが可能であると確認された。更に、このシステムに遠隔式の電磁ロックを組み合わせる事により、専門的な雑誌など、使用者が限定される事が予想される書籍に関しては、ある程度までの範囲で図書館以外の場所に集中的に書籍を配置して、自動管理をする事が可能になると考えられる。



写真1

ガラス製アンテナを用いた読み取りテスト

このシステムを利用する事で、学内における書籍資料の分散配置と偏在化が可能になると考えられるが、つぎにその事を前提としてSUACにおける書籍配置の可能性について考えてみたい。

2-3. SUACにおける書籍配置の提案

昨年度の本学紀要にて報告した『SUAC図書館の将来の可能性に向けての提言』でも触れた様に、このままの毎年の増加を前提とした場合、本学における書籍の収蔵スペースはあと数年で飽和状態になる事が予想されている。この問題に対して体育館のスペースを書庫とする案もあるものの、体育館の床については設計で見込まれた床荷重に対して書庫に要求される床荷重が大きい事もあり、この部分における大幅な書籍収蔵の増加が難しい状況では、他の方法による対応の検討が必要と

なっている。

そこで、現状における大学内の敷地を検討した場合に、建物増築の可能性のある場所としてあげられるのが大学北東側の教職員駐車場および駐輪場の部分である。この部分に新たな図書館を増築することで、書籍の収蔵に関しての新たなスペースを確保する事が可能になると考えられる。またその際に、SUACにおける書籍の収蔵のあり方を再編成する事も可能になると考えられる。

例えば、現在の図書館を文化政策学部および文化政策研究科に関連する資料のための図書館として、新しく大学東側に計画する図書館をデザイン学部およびデザイン研究科に関連する資料のための図書館とし、その中間の北棟の各階に各学科および研究科に関連する書籍を配置する方法が考えられる。この方式のメリットとして次の点があげられる。

- 1) 書籍配置の分散化による横溢化への対応。
- 2) 大学の東西の端に図書館を配置し、その中間部にも書籍資料を収蔵する事による、書籍と学習環境の融和。
- 3) デザイン環境を考慮した図書館とすることによる、デザイン制作時における図書館利用の促進。

3. 学習・研究成果を展示するシステム

3-1. 作品や研究成果の展示に関する現状

次に、SUACの学習環境の向上についてのもう一つの可能性である、学習内容や研究成果を展示する方法について考えて見たい。SUACの現状を考えた場合に、文化政策学部・デザイン学部およびその両研究科からなる構成は、非常に様々な分野を包含するものであり、両分野が、それぞれの研究内容や制作物を通じてお互いに触発される事で、更なる成果が期待されるが、現状では両分野における相互理解は必ずしも十分であるとは考えられない。

そこで、お互いの研究成果や学生の制作物を展示して相互理解を促す事は、本学における新しい発想を導き、有益な結果をもたらす可能性があるものと考えられるが、その様な



写真2
現状におけるSUACの展示台

展示への検討項目としてあげられるのが作品や研究成果を置く展示台のあり方である。

写真2は現状におけるSUACの展示台の様子である。現状においてこれらの展示台は学内の常設展示や企画点において有効に利用されているが、将来的なニーズを考えると次の様な点に検討の余地が残されている。

- 1) 周囲及び展示物を置く部分がクロス貼りとなっているため、経年変化による劣化が生じ始めている点。
- 2) 台の下部にキャスターが付いているが、実際にはキャスターを使用して移動する場面が少なく、外観上も好ましくない点。
- 3) 台が分解できないために、写真でも見られるように展示していない時点では、台自体を収納するためのスペースが必要な点。
- 4) メディア系の作品など配線やコンピュータが必要な展示や、文科系の論文や書籍の展示への対応が考慮されていない点。

ここで、この様な問題点を解決するための展示台について、既製品を使用する場合の事を考えると、一般的な美術館で使用する展示台については、1台あたり定価で数百万円という価格の問題もあり、複数の台数を大学で導入する事は現実的に難しいと考えられる。一方で、店舗に使用する様な什器およびケースについては、価格の面で現実性があるものの、形状やデザイン面においてニーズを満たすものが見当たらないのが現状である。

3-2. 新しい展示システムの提案

そこで、本研究ではSUACの実情に応じた応用可能な展示システムについて検討することとした。写真3はこのシステムのベースとなるアルミフレームである。



写真3
展示台のベースとなるアルミフレーム

このフレームは既製品であり、基本となるアルミのフレームとそれらを接合する黒色のジョイント部分が分解可能であることから、さまざまな大きさに組み替える事が可能であり、使用しない時にはコンパクトに収納できるという利点がある。また、上部に天板を設置すればそれ自体が展示システムとして使用可能なものであるが、本研究で想定する展示については、さまざまな展示方法が考えられるため、コンピュータや配線の収納が可能な方が望ましい。また、場合によっては展示物を保護する必要が出ることも考えられる。

そこで、フレームで形成された立体の周囲をアルミパネルで包んだものが写真4の展示台のベース部分であり、上部には展示物を保護する必要のある場合の展示イメージを確認するために、既製品の亚克力ボックスを載せてある。

この様にフレームをアルミパネルで外装するシステムの利点として、次の点が挙げられる。



写真 4

アルミパネルで外装された展示台

- 1) 展示台の内部を隠蔽する事ができるので、コンピュータを内部に設置する事や、下部に転倒防止のための錘を入れる事が出来る。
- 2) 配線や器具も隠蔽可能になるのでLEDを使用した照明を、美観を損なうことなく取り付ける事が可能になる。
- 3) 展示台の大きさに関しては、ベースとなるアルミフレームが100mmから1200mmの範囲でモジュール化されているために、それらを組み合わせることで様々な大きさの台を制作することが可能となる。
- 4) パネル自体はアルミで出来ているためにクロスに比べて経年変化による劣化が生じにくい。
- 5) 部材相互はアルミフレームにビスで止めているために、使用しない時にはフレームとパネルに分解してコンパクトに収納できる。

また写真4では、イメージ検討のため、上部にアクリルボックスを置いているが、更にアクリルボックスとアルミ部分の組み合わせを簡単に取り外せない構造にすれば、比較的小さい作品の場合にも、持出しなどを防止しながら展示する事が可能になると考えられる。この展示システムについては、上部のアクリルケースの固定やセキュリティなど細部の検討が必要な部分が残されているものの、市販

の美術品展示ケースに比べて1台あたり1/10か、それ以下の価格で製作可能になると考えられる。

以上、本システムは将来的にSUACにおける制作や研究成果の展示、あるいは広報の分野において有効に利用できる可能性があると考えられる。具体的には映像作品や大学案内のビデオ放映や、(写真6)学生の優秀作品の展示を行うことで、学内外に対して情報を発信したり、学外の関係者との相互理解を促す効果や、課題制作時におけるモチベーションの向上を促す事が期待できると考えられる。



写真 6

試作台を利用したビデオ上映イメージ

4. 授業や学習時における図書館の有効利用を促進する方法についての考察

4-1 図書館を活用させる授業の試み

大学図書館の有効利用を考えるにあたって、まず学生の利用状況や図書館利用の問題点などを把握する必要がある。このため、2008年度「地域情報サービス論」の授業で図書館を活用させる課題を3回与え、それについてのアンケートから、学生の利用状況や問題点を把握することにした。

この授業は、文化政策学部共通科目で学部

2年生を対象としている。今年度の登録者は150名、アンケートの有効回答は89件であった。

課題1では調べる図書を指定、ただし指定図書として一箇所集めることはせず、請求記号を手がかりに探させる方法をとった。課題2は調べる図書は指定せず、各自で参考図書を探させるものであった。課題3では、地域に関する調査、テーマに関する図書、雑誌論文の探索も行わせた。その上で、それぞれの探索で難しかったことなどをたずねた結果が表1と2である。

「資料を探すのが大変であった」に対して課題1が17%であるのに対して、課題2は27%になっている。指定された図書を書架上で探すことは容易であるが、テーマに適した参考図書を探すことは難しいと感じている

表1

設問	課題1	課題2
1. 資料をすぐ見つけて調べることができた。	54(61%)	42(49%)
2. 資料の配架場所はすぐわかったが、所定の場所がないことが多かった。	18(20%)	13(15%)
3. 資料を探すのが大変だった。	15(17%)	27(31%)
4. その他	1(1%)	3(3%)

表2

設問	回答数
1. 自治体についての調査	17(20%)
2. 図書、雑誌記事の探索	54(60%)
3. 図書、雑誌記事の入手	53(60%)
4. 関連する機関、団体の調査	32(35%)
5. 調べている図書館のサイトから必要な情報を見つけること	1(1%)
6. その他	

ことがわかる。

課題3で特に難しいと感じたことに選ばせた表2においても、図書、雑誌記事の探索と入手が60%と最も多い。

この結果から、本学の学生の場合、テーマに適した参考図書や図書、雑誌論文の探索にまず困難を感じていることがわかる。

学生は普段どのように図書館を使っているのだろうか。普段どのように図書館を使っているかをたずねた結果が表3である(3点まで選ぶ)。全体に対してと、図書館をゼミ・卒論のために利用すると回答した3年生の回答

表3

利用方法	全体	ゼミ・卒論のため
回答数	89	20
1. 図書を読む	23(25%)	10(50%)
2. 図書を借りる	54(51%)	17(85%)
3. 図書のコピー	9(10%)	2(10%)
4. 新聞・雑誌を読む	5(5%)	2(10%)
5. 新聞・雑誌記事の検索	5(5%)	2(10%)
6. 百科事典などで調べる	27(30%)	3(15%)
7. インターネットにアクセス	37(41%)	9(45%)
8. メディアステーションで課題作成	66(74%)	15(75%)
9. 自習場所	23(25%)	3(15%)

結果を並べてみた。

全体では、「メディアステーションでの課題作成」が4分の3を占めており、「図書を借りる」がそれに続いている。それに対して、「図書のコピー」や「雑誌・新聞を読む」「雑誌・新聞記事の検索」は非常に少ない。この傾向は「ゼミ・卒論の為に利用する」を選んだ学生にも共通している。

学生は図書館を、「図書を借りる場所」「課題を作成する場所」として利用しており、調べるための利用が少ないようである。

学生はこの授業履修以前に、情報検索について学んだ経験はあるのだろうか。WebcatPlusとCiNiiあるいは雑誌記事索引での検索経験があるかどうかをたずねた結果が表4である。

これによればほとんどの学生が、これまでに探した経験をもっている。

4-2 学生に図書館を活用させるための提案

4-2-1 図書館を活用させる授業

以上の結果から、学生は図書館を調べ場所として使っておらず、テーマに即した参考図書、図書、雑誌記事の検索も難しいと感じていることが明らかになった。

表 4

	学年	WebcatPlusで 特定分野の図書 を探した経験		CiNiiもしくは国立国会 図書館雑誌記事索引で 雑誌記事を探した経験	
		ある	ない	ある	ない
国際文化学科	2	19 (60%)	13(40%)	23(72%)	9(28%)
	3	11 (79%)	3(21%)	11(79%)	3(21%)
文化政策学科	2	24 (82%)	5(18%)	22(76%)	7(24%)
	3	3(100%)	0	2(66%)	1(33%)
芸術文化学科	2	8 (73%)	3(27%)	8(73%)	3(23%)

これに対しては、情報リテラシーを高める科目の充実も必要ではある。しかし表4に見られるように、授業で図書、雑誌論文を探した経験をしていても、日常の利用には結びついていないようである。このため、学生の自主的な学習に期待するだけでなく、授業で教員が図書館を使わなければならない課題を出すことが重要となってくるのではないかと考えられる。

4-2-2 図書館の整備

参考図書や図書、雑誌を探すことが難しいと感じている学生へのサポートも必要である。調べ方を身につけていくためには、実際あれこれと資料を手にとって見ることになる。ここでサポートを期待したいのが、図書館のレファレンスサービスである。教員の場合、常時図書館で待機していることはできない。教員に教えてもらうのではなく、自発的な学びの姿勢を育てるためにも、教員以外のサポートが好ましい。さらに、情報の探索は、大学卒業後も必要となってくるが、その場合、常に教員のアドバイスが受けられるわけではない。しかし図書館員のサポートが受けられることがわかっていれば、探索の第一歩として地元の公共図書館などを使うことができる。

5. まとめと展望

以上の平成20年度における研究成果から、本学の学習環境の向上に関して次の可能性が見出された。

まず、現在の技術を応用した学習環境向上の可能性としては、次の2点が挙げられる。1点目は学内において新しい図書の配置をとることによって、学習環境における図書のあり方に新しい意味づけを持たせて、従来の図書館とその他のスペースという関係性から、偏在化した図書の中での学習という関係性の構築の可能性が見出されたことである。このような配置の考え方は、将来的に学習時における図書の利用のあり方について新しい関係性を持たせる可能性にもつながると考えられる。

2点目として挙げられるのは、システム化した展示方法を採用することによって、学内における制作や研究の成果を学内外に向けて展示する可能性が確認された事である。学習と研究成果の展示については、学内における相互理解の促進や優秀作品を展示することによるモチベーションと成果のレベルの向上、また学外に向けてのPR効果など様々な波及効果が考えられる。

次に授業における図書館利用の可能性の検討から、教員と図書館員が一体となった仕組みをつくることで、学生に図書館を活用した学びの習慣を身につけさせる可能性が考えられる。

今後は、本学における与条件を勘案しつつ、SUACならではの図書館と新しい学習環境のあり方について検討を行う予定である。

本研究活動は、平成20年度学長特別研究「新しい学習環境の研究」よりの研究費を得て実施されたものである。また、書籍自動管理システムの検討に関してはお茶の水女子大学の塚田特任助教のご協力を頂き、展示台のシステムに関しては、生産造形学科の山本教授のご協力ならびに、空間造形学科の鳥居教授と原田実習指導員に試作品制作についてのご協力を頂きました。ありがとうございました。

